

「太宰治と中村地平——北方文学と南方文学——」

宮崎大学名誉教授

岡林

稔

# 目次

- 一 はじめに
- 二 二人の出会いから  
―友情・反発・絶交・和解・離反―への展開
- 三 離反から生まれた新たな作品
- 四 太宰の北方と地平の南方
- 五 おわりに

## 一 はじめに

太宰治と中村地平は、ともに昭和五年（一九三〇年）に東京帝国大学文学部に入学しているが（太宰が仏文科・地平は美術史学科）、生年は地平が一九〇八年で一年早く生まれている。そして学生時代から共に井伏鱒二の門下生として青春の一時期を過ごしたこと、その後、二人が『日本浪漫派』に同じように属していたこと、そして両者とも津軽（青森）と日向（宮崎）の、地方の素封家の息子であったことなどが共通項としてあげられよう。これとは反対に、対立項として両者を分ける項目は数多くあるなかで、「北方文学」と「南方文学」という風土的な対立項は、ある意味では両者の文学の世界を象徴的に分けるものといえるのではないだろうか。

かつて中村地平と旧制宮崎中学校で同窓だった国文学者長嶺宏は、宮崎出身の若山牧水と山形出身の斎藤茂吉の対比を、例えば茂吉の、「みちのくの蔵王の山のやま腹にけだものと人と生きにけるかも」や「しろがねの雪ふる山に人かよふ細ほそとして路みゆるかな」と、牧水の「なつかしき春の山かな山すそをわれは旅人君おもひ行く」や「地（つち）ふめど草鞋声なし山ざくら咲きなんとする山の静けさ」など、『赤光』と『別離』の歌数十首を取り上げて、「ここにみられる（茂吉の）自然と人間の関係は、牧水におけるように調和的親和的ではなく、違和的対抗的である。そうしてこのような関係の原型は、まさしく温暖湿潤な南方風土における自由民と、寒冷乾燥の北方風土における農民とのなかにあった、と考えられる」としている。この比較論が直接に太宰と地平に通じる訳ではないが、両者の北方と南方を手がかりとして対比される作品として、小山書店が戦前に出した新風土記叢書の『津軽』（一九四四年）と『日向』（同年）がある。そこ描かれた両者の世界には、単なる自然環境ではな

く、人間の「自己了解の仕方」としての「風土」<sup>2</sup>の違いがあつて興味深い比較ができるが、これについては後で触れることにする。その他に、童話のジャンルに入る両者の作品も対照的で、個性の違いが顕著である。「何の遠慮もなく、思う存分そのお伽噺をきりきざみ、奔放な空想力をはばたかせ」て「子供向きのお伽草子はたちまちしゃれた近代小説」<sup>3</sup>とされた太宰の「お伽草子」と、ひたすら民話の世界に没入しようとし、子供たちの、情操教育に腐心した地平の民話集『河童の遠征』（全国書房、一九四四年）との違いも、長嶺の言う「違和的・対抗的」と「調和的・親和的」な違いに加えられるであろう。

## 二 二人の出会いから

### ―友情・反発・絶交・和解・離反―への展開

太宰治と中村地平を比較し論じた先行研究としては、森永国夫の『太宰と地平』（鉾脈社、一九八五年）、そして新しいところでは、松本常彦の「中村地平と太宰治」―「活字」の「手紙」（『太宰治研究14』（和泉書院、二〇〇六年））がある。前者は二人の交友関係を中心に、地平とも面識のあつた、宮崎市在住の森永国男が、皆美社の中村地平全集からはもれている「失踪」などの作品も頁数も多く引用し、とくに太宰治へのオマージュ的な要素が強い著書である。後者の、地平に関する項は短いものだが、太宰の「喝采」と地平の「失踪」を軸にして、それに付随して両者の間に交わされた書簡（伝記的資料としては残っていないが）と、「君への御返事雑誌へ掲せることにした」で始まる「太宰治へ」という『日本浪漫派』に発表された地平の作品を中心に論じている。一方、松本論文は、「彼らの文章を「活字」の「手紙」として読み直す必要がある」として、この時期に集中して書かれた地平の作品（「悪夢」や童話「茗荷谷雑

記三)の「私秘的メッセージ」性を読み取る作業の価値を説いた論考である。

さて、サブタイトルの「北方文学と南方文学」という表題は、両者の比較文学的な論調を期待させるが、この講演の趣旨は、中村地平がいかにして南方文学樹立に向かうことになったかの背景に触れることであり、ちょうどそのターニングポイントの時期に当たる、昭和十年から十一年にかけての事件―「太宰治と中村地平の衝突」―が重要な鍵になっていることをお話しすることである。

そもそも二人の出会い、昭和五年東京帝国大学に同時に入学するところから始まる。実際の交友は二年後の昭和七年頃であるが、共に井伏鱒二の門下生となり、熱く文学を語り、将棋を差し、飲み食いし、それぞれの下宿を訪問しあうことも頻繁にあった仲であり、極めて「近接的」であったのだ。

そんな二人が友情・反発・絶交・和解・離反という熱い感情でもつれ合うようになったのは、地平がまず昭和十年三月の、太宰の、鎌倉での縊死未遂事件を素材にして、「失踪」を書いたことに始まる(同年八月一日発行の九月号の『行動』)。それに対して太宰が長い手紙を書き、地平がその手紙の返事の代わりに「太宰治へ」(同年十月一日発行の『日本浪曼派』七号)を書いた。そして昭和十一年十月号の『若草』に、太宰が「喝采」を書いて、まさに「活字」の「手紙」の応酬が行われたわけである。

しかし実際には二人には実は次のような「蜜月」の時期もあった。

「僕は北方津軽の生まれだが、君は南国日向の産だ。君よ。君はこういう愛誦すべき句をしっているか。君は西枝の赤き花、僕は北枝の白き花」

「君はシルレルにして、僕はゲエテ。ああ、僕はゲエテにして君はシルレル」(「失踪」)

このように二人はエールの交換をし、お互いの才能を認めあう好敵手同士であった。そんな二人が、しかし、寄ると触ると喧嘩を始めることがよくあったらしく、「なぜそんなに喧嘩していたか今だに私にはわからない。この二人の喧嘩は、酒の気がなくても毒舌の応酬を交わす点が珍しかった」と、二人が師事した井伏鱒二が回想している<sup>4</sup>。また、あるとき、二人は創刊号で終わった雑誌『青い花』を巡る意見の対立で激しくやり合ってしまった。この事件は当時の仲間うちでも相当話題にもなったようである。中谷孝雄の回想<sup>5</sup>では次のような太宰の話を証言している。

「青い花がつぶれたのは僕と中村がケンカしたからなんです。」  
「中村が芸術家なら太宰は俗物です。太宰が芸術家なら、中村は決定的な俗物です。」

あのエールの交換が嘘のようで、両者の個性の併存がありえないとするほどの激しい太宰の剣幕である。地平は地平で「太宰治は一生僕の友人ではない」とまで言い合うことになってしまう。

その喧嘩の後、太宰は地平が勤めていた都新聞社までやって来て、その仲たがいを修復すべく飲みに出ようと誘いだそうとしたのである。しかし、地平は、まだわだかまりがとれずに、一月前の「永久に太宰とは友人ではない」と言った言葉を思い出しながら、「ほんとは今日は君と語りたかった」と懇願する太宰を冷たく拒絶してしまっただけだ。

その直後に太宰の失踪騒ぎが起こったのである。

この年(昭和十年)三月には太宰は、地平の勤める都新聞社の入社試験に失敗し、同月十六日に小善四郎と遊んだあと一人鎌倉に行き、郷土の先輩作家深田久弥を訪問、その夜八幡宮近くの山中にお

いて縊死を計る。しかし未遂に終わり、十七日深夜、井伏鱒二や地平が待つ自宅に帰宅するという事件であった。「自殺する決意で失踪をしたのが本当だとすれば、彼は最後の訣別に、一杯の酒を汲むために、僕を酒場に誘ったのに違いない」と思った地平は、失踪騒ぎで皆が集まっている太宰の家に、「胸いっぱいの焦燥や悔恨」を抱きながら駆けつけていたのである。

このときの事件が「失踪」に描かれ、『行動』の九月号に発表されたのであった。太宰はこの作品を読んで地平に相当長い手紙を出した（残念ながら、地平は後年この手紙を宮崎相互銀行（現宮崎太陽銀行）に入る時（一九五七年）焼いてしまったと言われている）のだったが、地平は、直接返事を書くかわりに、「太宰治へ」と題したこの文章を『日本浪漫派』に、参加後初めての作品として発表したものであった。

「僕の小説読んで戴いたそうで有難う。あの小説は君と喧嘩するつもりで書いた。悪意をもって書いたわけでは、勿論ないが、善意をもって書いたわけでもない」と書簡体で書き出されるが、最後には「君の病気が癒くなつて、そのうちに東京に出て来たら、早速電話してくれないか」と、穏やかな閉じ方をするだけでなく、「君と半歳以上も会わない間に、僕にもいろんなことがあつたんだよ」と、友人太宰に内緒話でもしたような雰囲気である。

その当時は太宰が麻薬の効果があるバビナール使用とその中毒に苦しんでいたりと、八月の第一回芥川賞は石川達三の「蒼氓」が受賞し、太宰の候補作「逆行」が落選したことなどで、尋常ではない心理的背景があつたことも事実である。また、太宰は雑誌『行動』の発売直後に「失踪」を読んで、すぐに地平に長い手紙をしたため、その返事を地平は十月号の『日本浪漫派』の原稿締切に間に合うように「活字」の「手紙」として「太宰治へ」を書くという慌ただしさであった。そして太宰は今度は、翌十一年の『若草』十月号に「喝采」を

発表したわけである。

この「喝采」及び、後に触れる地平の小説「悪夢」（『日本浪漫派』第二巻十号（昭和十一年十二月））こそ、太宰と地平との間にあつた「友情」と烈しい「反撥」の証左となるものであり、それが契機となつて地平の文学が、男女の悪性を描いた都会の心理小説から、一転して、劇的に南方文学に向かうこととなつた。「悪夢」はその方向性を決定的なものにした、いわくつきの作品であり、一連の衝突は、一つの文壇的「事件」が一つの作品を生み出したものであつたとも言えよう。

「喝采」は、地平は常日頃から太宰の道化じみた言いがかりに馴れていたかもしれないが、読む当事者には刺々しい毒のある文章である。この時期は太宰がバビナール中毒に苦しんでいる最中の時であつたこともあるが、「喝采」は作品とは言い難く、戯作者の舞台口上のごとき戯れ文で、「失踪」が「モデル小説」であるなら、これは名指しの、戯文・道化を交えた「暴露本」のようである。奥野健男は、「自虐道化の文体とデカダンスの姿勢の中に、中村地平との交友の真情あふれた美しさがいつまでも心に残る」と述べているが、「中村地平という少し気のきいた男」という言い方からして尋常ではない。「真情あふれた」二人の関係がどこかに読み取れるにしても、とても「美しい」とは取りがたい部分も多い。少し引用してみる。

わたしは中村地平という少し気のきいた男と、のべつまくなしに議論していて半年ほどをむだに費やしたことがございます。そのころ、かれは、二、三の創作を発表し、地平さん、地平さん、と呼ばれて、大いに仕合わせであつた。（中略）その地獄の日々より三年まへ、顔あわせるより早くも罵詈雑言…お互いの身なり風俗、殺したき憎しみもて左右にわかれて、あくる日は又、

早朝より、めしを五杯たべて見苦しい。いや、そういう君の上品ぶりの固陋頑迷、それから各々ひらき直って、いったい君の小説——云々と、おたがいの腹の底のどこかしらで、ゆるせぬ反撥、しのびがたき敵意、あの小説は、なんだい、とてんから認めていかなかったのだから、うまく折り合う道理はなし。

地平の「太宰治へ」の文面から想像するしかないが、「失踪」を読んだ後に出したと言われる、あのとときの太宰の手紙とはうってかわって、公に晒した文章としても極めて揶揄的であり中傷的である。

地平自身がそれに対して感想を述べた二十年後の「喝采」前後（『太宰治全集第二巻・月報2』昭和三十年十一月）によれば、「その作品を読んだとき、僕は自分がカリカチュアライズされているという理由からだけでなく、文章にあらわれている僕への好意らしきものも、じつさいは口さきだけの、おべっかにすぎないとひがんだ。読後の印象として、ひどく不愉快なものをうけとった」と述べている。先にあげた奥野健男氏の他には、井伏鱒二が「モデルの中村地平には相すまぬが、友愛の情と皮肉の目の五分五分で、当時の中村君の動静に活写を試みている」という感想もある。<sup>7</sup>

そして、「喝采」掲載（『若草』十月号は九月十日発売）の直後に当たる『日本浪漫派』第二巻十号（昭和十一年十二月）に発表された地平の「悪夢」もその発表のタイミングからして、また松本氏の指摘する「私的メッセージ」性の意味も含めて、ここで取り上げておかなければならない。確かにこの作品のテーマは「白い雲と黒い牛」（『作品』昭和十年六月）、「花子」（初掲載誌不詳）、「イルゼとその母」（『日本浪漫派』第二巻七号（昭和十一年九月））などの作品の中でこの数年地平が取り組んでいた、「生と死」や「男女の悪性」であり、いわゆる「意趣返し」として書かれたわけではない。女性を巡る関係も、裏切り行為があったわけでもない。しかし、友情と

反撥の繰り返しの末に、修復不可能な「離反」という化学作用がおきてしまったと言えない事件であり、その渦中に書かれた作品だったと言えよう。

### 三 離反から生まれた新たな作品

実は地平はこの後に大きな転機を迎えることになる。地平が郷土を舞台にした作品「土龍どももぼっくり」（『日本浪漫派』昭和十二年五月）、「南方郵便」（『文学界』昭和十三年四月）を発表し、さらには台湾を舞台とした作品で本格的となる「南方文学」への第一歩を踏み出すのはこの直後のことであった。やがて精神科に強制入院させられ、麻酔中毒下にあり、尋常な精神状態ではない太宰からとはいえ、蔑みの感情を露わにして、「喝采」にあればもまでに書かれて、地平も絶交状を突きつけたいほどであったろう。創作面ではモデル小説や深刻めいた都会小説への決別を本気で考え、あえて太宰とは全く違う方向への転換を図ったと考えられるタイミングであった。

ここで、件の「喝采」や「悪夢」が書かれた昭和十一年前後までの中村地平の経歴を辿ってみると、明治四十二年に宮崎市に生まれ、旧制宮崎中学校を卒業した後、創設されて間もない台北高等学校に大正十五年（一九二六年）入学している。台北高等学校を選んだのは「九州の中学を卒業すると、僕は台湾にある高等学校を受けたい。佐藤春夫氏の影響などで南方に憧憬する気持ちが強かったためである」とあるように、同じように神経衰弱に悩まされていた佐藤春夫に憧れ、文字通りその指向線上に「南方文学」があった。その後東京帝国大学に入学した二年後には、学生時代の台北の下宿を舞台に「熱帯柳の種子」（『作品』昭和七年一月）を発表し、その佐藤春夫から絶賛されて文壇にデビューすることになる運命的な出会いで

もあつた。

その後も井伏門下にあつて、「廃港淡水」(『四人』二号、昭和七年)、「白雲はなぜ窪地のうえに鬩いているか」(同三号)、「南海の紀」(同五号、昭和八年)などの台湾生活の素材を作品化した。大学院を中退し都新聞に入社した後さらに創作に専念するようになって、先に挙げた「失踪」、「太宰治へ」、「イルゼとその母」、「悪夢」などの作品を手がけるが、いずれも地平の代表作と位置づけられるものではない。むしろ悪戦苦闘しながら自己の文学の進むべき道を模索していた混迷の時期と見るべきであろう。そして、その苦悩の最底部で書かれたのがこの「悪夢」であつたのだ。

「悪夢」は、「カリエスの原因である結核菌と、それ以外に遺伝性の梅毒菌が巣くっている」花子との関係を、「男の悪徳によって女は永久に救われない」として、女が救われないことよって、男も永久に救われない」という男女の関係を、「宿業から逃れられない人間存在」として描いた作品である。作品が書かれた時期は昭和十一年も後半になり、真杉静枝との愛のない生活を思わせる私小説の雰囲気である。八歳年上の真杉との同棲は、「夫婦としてのおさまり方にはなれない」<sup>10</sup>共同生活であり、「あなたはわたしを喰い物にして、あなたの文学を育ててゆけばいいんだわ」(「発端」)<sup>11</sup>という、愛よりも芸術を至上と考える、尋常ではない夫婦関係であつた。この男女の関係は戦後の作品の主題としてふり返えされ、昭和三十年の作品では、女は河童に姿を変えて登場し、「河童とのにごつた生活」を精算することを、僕は心に誓つた。魍魎魍魎よ、去れ」(「山の古の池」(『群像』)とまで主人公に言わせ、作者の執着の深さが窺われる。

作家としての経歴からすると、地平はこのテーマの作品化には相当難渋していたようで、この「悪夢」は「陽なた丘の少女」(『新潮』昭和十三年)に改作されるし、この時期に書かれた「花子」も「土

龍どんもぼっくり」としても改作されていく。自らの問題として「女の悪性」を手元に引き寄せ苦悩し続けた結果であり、地平の小説にはおなじみの、主人公の名前「山名」や「三吉」(「失踪」では「山名三太」)が頻出するのは、「私」と置き換えてもいいほどに、都会小説の世界からの脱却を図る地平自身の苦悩が「分身」としてそこに展開されていたのである。

こうして、一つ屋根の下で「互いに小説を書くための神経を練る勉強をしよう」と、バスケット一つの支度で上がり込んできた真杉との「神経戦」の苦渋を背景にもつだけではなく、この「悪夢」には、「喝采」を書いた太宰への私憤とともに、陰湿な自作との「近接性」があつたのも確かである。<sup>12</sup>夢の中で花子を足蹴にして暗い海の中へ沈めてしまう場面だけでなく、心中の相手が死に、男の方が生き残る場面も描き出されている。

海へとびこむと、女は苦しまぎれに山名の腰にからむように抱きついてくる。その時どういうわけか「女を生かして置くわけにはいかぬ」<sup>13</sup>という考えが、まるで天の啓示のごとく、山名の頭にはひらめいてきた。からみついてくる女をふりほどき、つきとばし…

誰もが、太宰治の、熱海での田辺あつみとの心中事件を連想するであろうし、たとえ、地平が常用する「山名」という名前でカムフラージュされようとも、松本氏言うところの太宰を相手とする「私秘的メッセージ」性が否定できない。それまで書いて来た「男女の悪性」を描いて来た自作との、自縄自縛の「近接性」がここにはあつた。

#### 四 太宰の北方と地平の南方

このように後味の悪い友情の破綻からも、この自らの文学世界の行き詰まりからも脱却を図らざるを得なかった地平は、結果として、「土籠どんもぼつくり」や「南方郵便」という郷土の文学を経て、一気に「霧の蕃社」を中心とする「南方文学」への方向に転じて行くことになる。

一方で、この衝突の後も、太宰は太宰で芥川賞への執念を燃やし、戦後も「斜陽」や「人間失格」といった代表作を書き、やがて山崎富栄との心中事件で没することになる。上で述べた修復不可能な「離反」という化学作用には、「悪夢」という作品が更なる触媒の働きをなして「南方文学」の誕生へと導かれたとも言えようが、お互いに意識こそしてはいなくても、両者には、互いに弾きあう水油の性格の違いも何処かにあったのではないか。改めて両者の北方性と南方性の差異に話題を戻してみたいと思う。

最初に言及した太宰の『津軽』の入り口には一つのヒントがあった。「都会人としてのわたしに不安を感じて、津軽人としての私をつかもうとする念願である。言い方を変えれば、津軽人とはどんなものであったか、それを見極めたくて旅に出たのだ」（蟹田）として津軽に帰った時のことだった。「あれは春の夕暮れだったと記憶している（中略）ひとりで弘前城を訪れ、お城の広場の一角に立って、岩木山を眺望したとき、ふと脚下に、夢の町をひっそりと展開しているのがつき、ぞっとしたことがある」／「万葉集などによく出てくる「隠沼（こもりぬ）」というような感じである。わたしは、なぜか、その時、弘前を、津軽を、理解したような気がした」と太宰の「自己了解」の仕方が述べられている。結局、太宰のすべでの罪の意識は、「生まれてすみません」・「罪、誕生の時刻に在り」

（二十世紀旗手）に集約され、貧しい農民を搾取した新興の地主の家に生まれた負い目、数々の女性との心中事件や不倫などの罪意識の集大成が、太宰文学の世界だと言っても言い過ぎではない。

一方、地平もまた、「故郷は、ひつきよう自分自身である」として書き出された『日向』の中では、「その土地に実際に脚を一步みれば、人は誰でも、暗さとは反対のもの、つまり非情な明るさを感じるにちがいないのである（中略）日向の自然は、訪問者たちが言うように、もの柔らかかで、暢びりしているというのが事実のようである」と述べている。

ここに二人の対照的な作品を、上にあげた風土的な側面からあげてみよう。太宰は「魚服記」（『海豹』創刊号、昭和八年）において、父親に陵辱され滝壺に身を投げた娘スワの描き方には、人間の罪に目を背けず「隠沼（こもりぬ）生い茂った草などに隠れて水面の見えない沼」『日本語大辞典』（講談社）に沈下しつづける、執拗な罪の存在への拘りがあった。

疼痛。からだがかしびれるほど重かった。ついであのかさい呼吸を聞いた。

「阿呆。」

スワは短く叫んだ。

ものもわからず外へはしつて出た。

吹雪！それがどつと顔をぶつた。思わずめためた座つて了つた。

みるみる髪も着物もまつしろになった。

スワは起きあがって肩で息をしながら、むしむし歩き出した。

着物が烈風で揉みくちやにされていた。どこまでも歩いた。（「魚服記」）

一方、地平の「南方郵便」における最後の場面は、罪の追及は極



めて淡泊であり、大らかさを主題とした地平の南方文学の象徴的にもいえる取り扱いである。

早い南国の菜の花が、部落の畑いっぱいに咲きそろった頃、小浜は女の子を産んだ。赤ん坊の父親は死んだ源吉爺さんであった。併し村の百姓達は一本松の地蔵様かもしれない、と曰くありげな含み笑いをしながら噂しあった。

共に男の悪性をとらえながら、その違いは、二人の育った北方と南方の風土性と関わるものがあるとも言えるが、ここでは地平の南方文学への方向性から見てみよう。地平はこの時期の創作の方向を次のように述べていた。「現在日本に行われている文学の大部分は、東京的な、植民地的な都会文学か、さもなければ北方的な、観念的な心理主義文学かである（中略）日本文学の大部分がすべて安手な都会主義か、深刻癖のつよい心理主義ひといろに塗りつぶされているのを眺めて、憂鬱でないというわけにはいかない」。そして、反動として、「楽天性、行動的描写の卓越さ、感覚的な詩情、神話的空想力、熱情的な飛躍性」を特徴とする「南方文学」（『新しさの方向』（『知性』昭和十五年九月号））を提唱することになるのである。自分を今まで苦しめてきた「男女の悪性」に関わる苦悩の主題も、都会生活の中での「深刻癖の強い心理主義」、あるいは「北方的な、観念的な心理主義文学」から解放して、全てを南国の風土に帰せようとする文学の姿勢であった。悠久の昔から民族が営んでいる生活様式や世界観を包含した郷土の「風土」そのものに、「男女の悪性」のテーマを埋没させようとした試みであった。

## 五 おわりに

しかし、上にあげた「南方郵便」について補足すれば、「白痴じみた」一人の女性に老人の〈性〉が吹き込まれ、そのすべてが肯定される「南方郵便」のいわば積極的ニヒリズム<sup>13</sup>という問題性があった。これは家郷のある宮崎からさらに南下して「南に向かう」時代思想と無関係ではなかった。当時の軍部の「南進政策」の背景と重なり、「こうした異郷においてこそ、人間の欲望は限りなく官能的に、限らない不倫の夢へ<sup>14</sup>と向かうものとして、川村湊が指摘する同一軸の批判が及ぶ場合もありうる。

明治初年に喘息の転地療法のためにシンガポールに渡った女性もいたが、<sup>15</sup>神経衰弱を患い南の島に癒しを求めて渡った佐藤春夫や中村地平の時代は、そこが植民地であったことと決して無関係ではあり得なかった。太宰治との離反を生んだ衝突事件が地平を南に向かわしたとすれば、一人の作家が時代とは無関係には在り得なかった事実も物語っている。

「隠沼」の底に潜む人間の罪を写しとる北方の太宰治と、南国の菜の花畑に降り注ぐ陽光のなかで、大らかな人間の罪悪が解き放たれる南方の中村地平との対比は、和辻の「自己了解の仕方」に沿って風土的な両者の特性の一端を覗いた結果に過ぎない。中村地平の文学の本質は、この風土的な違い以上に、改めて「南に向かう文学者」の視点で検討されなければならないと思う。

1. 長嶺宏「牧水と茂吉」(『逍遙・鷗外論考』風間書房、一九八五年)
2. 和辻哲郎『風土』(岩波文庫、一九九四年)
3. 奥野健夫『太宰治論』〈決定版〉(春秋社、一九六六年)
4. 井伏鱒二「解説」(『太宰治全集・別巻』筑摩書房、一九七二年)
5. 「昭和文学の青春群像」(中谷孝雄氏に聞く)(『太宰治』8号・井伏鱒二特集、洋々社、一九九二年)
6. 奥野健夫『太宰治論』〈決定版〉
7. 井伏鱒二「解説」(『太宰治全集・別巻』)
8. 単行本『熱帯柳の種子』(版画荘、昭和十三年)には所収されている。
9. 「南方への船」(『仕事机』筑摩書房、一九四一年)
10. 真杉静枝「或る女の生立ち」(『新潮』昭和二十八年五月)
11. 未完の遺稿作品として『ポリタイヤ』(第十号、一九七一年)に掲載された。
12. 井伏鱒二『風貌・姿勢』(講談社、一九六七年)
13. 岡林稔『へ南方文学』その光と影』(鉾脈社、二〇〇二年)一〇七―一〇八頁参照。
14. 川村湊『南洋・樺太の日本文学』(筑摩書房、一九九四年)
15. 矢野暢『「南進」の系譜』(中公新書、一九七五年)